執達吏

與謝野寛

青空文庫

（壱）

眞田保雄の事を此の十年来何かに附けて新聞雑誌で悪く書く。保雄は是と云つて私行上に欠点のある男でも無く、さりとて文学者としての彼の位置が然う文壇の憎悪を買ふ程に高くも無い。其の癖新体詩家である保雄は不断相応に後進の韻文作家を引立てゝ、会を組織する、雑誌を発行する、其等の事に金銭と労力を費して居る事は一通で無い。彼が高利貸に七八千円の債務を負うて此の八九年間首の廻らぬのも全く後進の為に柄に無い侠気を出すからだ。彼とても芸妓と飲む酒の甘い事は知つて居やう、併し一度でも然う云ふ場所へ足を向けた事の無いのは友人が皆不思議がつて居る。彼は一月前迄費用の掛らぬ市外の土地を撰んで六円五拾銭の家賃の家に住んで居た。彼は何等の極つた収入も無い身の上だ。是が小説家であるなら今時駆出しの作家でも一箇月に三拾円や五十円は取るのだもの、文壇の人に成つて拾年以上も経て居る。保雄が毎月の生活に困る様な事も無からうが、新体詩は然う買つて呉れる所も無いから保雄の方でも自分から進んで売らうとは仕無い、偶ま雑誌社からでも頼まれゝば書くが、其とても一週間近く掛つて苦心した作が新聞小説家の一回分の稿料の半分にも成るのぢや無い。で保雄はいつも貧乏で加之に高利貸の催促に苦められて居る。

保雄の妻美奈子は有名なる歌人だ。もとは大坂の町家の娘で芝居の変り目には両親が欠かさず

道頓堀へ伴れて行く程であつたが、保雄の妻と成つて以来良人と一緒に貧しい生活に堪へて里家から持つて来た丈の衣類は皆子供等の物に縫ひ換へ、帯と云ふ帯は皆売払つて米代に為て、自分は洗ひ晒しの襤褸の下る様な物計り着て居る。四人の子供が交代に病気をするので其の介抱疲れや、新聞社と雑誌社から頼まれて夜分遅くまで投書の和歌を添削する所から其の安眠不足などの所為で、近年滅切り身体が痩せこけて顔色も青褪めて居る。妻の此の生活に疲れた状が保雄の心には気の毒で成らぬけれども、此の境遇から救ひ出す方法も附か無いので腑甲斐ない良人だと心の内で泣乍ら已むを得ず其日其日を無駄に送るより外は無かつた。実際妻が身体を壊す迄働いて月々纔に得る参拾伍六円の収入が無かつたなら眞田の親子六人は疾くに養育院へでも送られて居たであらう。此の妻の収入があるので米代と薪炭費丈は先づ支へる事が出来た。其上妻は暇の無い中から時々小説とかお伽噺とか女子書翰文とか自分の歌集とかを作つて、其の原稿料で家賃の滞りや薬価や牛乳代の足しにする。保雄も会の方から会員の謝礼を毎月合せて拾五円から弐拾円位貰はぬでは無いが、会の雑誌の費用に出して仕舞ふから一文半銭自分の身に附くのでは無かつた。

『貴方、なんとか御考が附きませんか。』

美奈子は去年の夏の末頃到頭堪へ切れ無いで斯う言ひ出した。

『浪人を止めて己の身売を為ても宜いが、評判の善くない己の事だから世話の仕手も有るまいて。』

神経質の妻は眉と眉との間を顰めて、

『そんな事を仰るもので無い、貴方を勤人におさせ申す位なら私、こんな襤褸を下げて苦労は致しません。』

『ぢやあ、何うすれば宜い。』

『いつか仰つた様に雑誌を満百号限りお廃し遊せな。それは貴方に取つても私に取つても残念ですけれど。』

『実は己も然う考へて居る。会員には済まん様なものだが、眞田家の親子六人、命を賭けて迄維持せねば成らぬ事も有るまい。会員の中には詩の実力の定つた連中が大分にある。今己の雑誌が無く成つても此の八九年間に蒔いた種はいつか芽を吹くだらう。』

斯う相談を決めて其年の十一月に保雄は満百号の記念号限り雑誌を廃めて仕舞つた。新聞雑誌の文芸記者の中には稀に保雄が永年の苦闘に同情して雑誌の廃刊を惜んだ記事を掲げた人もあつたが、大抵は冷笑的口調で、保雄の雑誌は五年前に既に生命を亡つて居たのだ、今日の廃刊は遅過るなどゝ書いた。

（弐）

此春に成つて保雄の一家は市外から麹町区へ引移て来た。其は長男が学齢に達したので市内

の小学校に入れる為と、美奈子が五人目の子を妊娠して居るので婦人科の医師や産婆の便利の善い市街に住まうと云ふのと、保雄夫婦の心では九年間の郊外生活に厭いたので、市内に住んで家が新しく成つたら心持も新しく成つて異つた創作も出来やうと思ふのと、是等の理由から六円五十銭の家賃の家を捨てゝ二十三円の高い家賃の家へ思切つて引移つた。去年の末に幸ひ美奈子の長篇小説が某新聞社へ買取られたので、其の稿料で大崎村の諸払の滞りやら麹町の新居の敷金やら引越料やらを辛と済す事が出来た。

新しい家は二階造で引越した当分の気持が実に佳い。此の二階の明るい書斎でならば保雄が計画して居る長篇小説も古事記を材料にした戯曲も何うやら手が附けられ相に思はれた。引越して五六日間は板を買つて来て棚を彼処此処に附けるのも面白いし、妻が瓦斯で煮沸をするのを子供等と一緒に成つて珍らし相に眺めたり、又招魂社の境内へ子供等を伴れて行つたりするのも気が伸々する様であつた。七八日目に、

『貴方、此の月末から何うしませう。田舎と違つて大分街では生活が掛り相ですわ。』

と美奈子が良人の広い机の端に、妊婦の常として二階の上下に目暈がする其額を俯伏して言つた。

『然うだらう、家賃ばかりでも従来の四倍から費るのだからな。』

『もう、お小遣も無く成つたので御座います。』

『愈々初めの決心通り背水の陣だね。』

『従来も片時呑気な間も無かつたのですけれど、まだ大崎でなら永い間土地の人に馴染が有りましたから大抵の買物は借りて置けましたが此処は何から何迄現金ですもの。』

『心配しなさんな。明日から己が書き出す。此処へ来てから大分に気分も佳いのだから。月末には何うにか成るさ。』

『貴方に然う苦労をおさせ申し度く無い。私がもつと働けるなら働きたいのですけれど、何分此の身体ですもの、来月産を済して仕舞はねば本屋廻りも出来ませんし、其に目暈がね、筆を持つと大変にしますの。』

『お前に此上心配や労働をさせて成るものか、其れは己から云ふ事だ。己は此の八九年間雑誌の為にすつかり囚へられて居たが、雑誌が無く成つて見りや暇が出来たのだから、是からは来客を断つても書く積だ。此処へ来てからの生活向は己の責任にして置いて呉れ。』

良人は斯う確乎と云ふけれど、世間の人々は良人を誤解して何の縁故も無い人迄が毛嫌ひして居る。良人の書くと云ふ小説の原稿を何処の雑誌社で買つて呉れると云ふ当は全く無い。其れを知らぬ程の良人では無いが、持前の負嫌ひな気象と妻を労る心とから斯う確乎した事を云ふのであると美奈子は思つて居る。

『貴方は未だ雑誌の方の払ひも残つてますから、あの方の御心配もお有り成さるのね。』

『うむ、急に遣らなくても可いさ。月賦にでもすれば。』

『会員の方が会費を寄越して下されば、あの方は何うにか成るのですが。』

『寄越さ無いかい。』

『雑誌が無くなつた所為でせうが、今年に成つて三月の間に僅か十円ばかし。』

『寄越さ無いのが当前だ。』

保雄は昔から、自分の様な者が詩を添削して遣るのに仮令五十銭にしろ謝礼として会費を学生に出さすと云ふ事を心苦しく思つて居る。其れで会費を納めぬ会員の方が多数であるけれども催促がましい事を為無い。而して会費を納める人も納めぬ人も分け隔て無く其作物を批判し添削して遣つて居る。其方が保雄の心は安らかなのである。保雄は一面詩人を以て任ずると共に一面に後進の詩人の教育者を以て任じて居る丈あつて、彼の率ゐる梅花会の会員から有望な青年文学者を出して居る事も少く無い。保雄には幾分でも自分の感化を受けて然う云ふ青年文学者の出るのが唯一図に嬉しいので、永年の苦労も、分に過ぎた負債も、世間の自分に対する悪評も然程苦には成ら無かつた。斯う云ふ保雄の美点は二三の先輩と妻の美奈子と五六の門下生との外に知る者が無い。門下の中にも少し目鼻が附き掛けると、利巧な連中は文界の継児である保雄と交る事が将来の進路に不利だと見て取つて其と無く遠かる者も少く無かつたが、保雄は却つて其の連中の独立し得るに至つた事を喜んで別段憤る色も見せ無かつた。

（参）

『阿父さん、斯う云ふ人が来ました。』

と云つて長男の勇雄が持つて来た名刺を見ると、東京区裁判所執達吏鈴木達彌と印刷してある。保雄と美奈子とは黙つて顔を見合せた。と案内も待たずにどんどんと二階へ上つて来たのは、鼠色の褪めて皺の寄つた背広を着た執達吏と、今一人は黒の綿入のメルトンの二重廻を来た山田と云ふ高利貸であつた。

『先生、お久振で。』

と云つて笑顔もせずに二重廻の儘で山田は座つた。保雄は山田の態度が癪に障つたので、

『まあ其の上のを取ら無いか、其れぢや挨拶が出来無い。』

『まだ寒いですからなあ。』

と言ひ乍ら山田は渋々二重廻を脱いだ。下にはまがひの大島絣の羽織と綿入とを揃へて着て居る。美奈子は挨拶もせずに下へ下りて行つた。執達吏は折革包から書類と矢立とを出した。

『君は五年も遣つて来無かつたね。』

『はい、大分長く遠慮して居ましたが、先生は太相御運が直つたと聞いたから頂戴せずに居ては冥加が悪いと思つて。』

『僕は相変らずだ、運が直る所か、益々惨憺たるものだ。』

『いや、然うで無いて、余程貯蓄つたちふぢや有りませんか。』

『何処にそんな評判があるのだい。』

『博覧会を当込に大分土地を買収なさつたつて。』
『とんでも無い事だ。併し僕には珍らしい縁喜の善い噂だ。然う云ふ身分に成れば結構だが。』
『先生は隠しても日本中で知つてまさあ。新聞にも出てましたぜ。』
『ふふん、それは素敵だ。』
執達吏は書類を保雄の前に出して、
『何れ御示談に成りませうが、私の職務ですから成規の通に執行致しませう。』
『御苦労様です。差押へて呉れ給へ。何も有りや為無いよ。』
執達吏は先づ床の間の古書類を目録に記入した。
『古事記伝、大部なものですな。春あけぼの抄、万葉考、えいと、元享釈書。』
執達吏の読上げて居る書籍は此春郷里の兄から頒けて呉れた亡父の遺物である。保雄は父の遺骸を鬼に喰はれて居る様な気が為た。額、座蒲団、花瓶、書棚、火鉢、机と一順二階の品を押へ終ると、執達吏と債権者は下へ降りた。保雄も尾いて降りたが、美奈子は末の娘の児を抱いて火鉢の前に目を泣き脹して座つて居た。
『己が銭を蓄めて土地を買占めたと云ふ事が新聞に出た相だが、お前は読ま無かつたか。』
『読売の「はなしのたね」に出て居ましたよ。』
『然うか。其れで此の人達が来られたんだがね。』
保雄は相変らず自分に対する新聞雑誌記者の無責任な悪戯は己まないのだなと思つた。茶の間

の前桐の箪笥の前に立つた山田は、

『立派な箪笥だ。』

と云つた。最初美奈子が里から持つて来た幾棹かの箪笥を、八年前に競売せられてから去年の春迄一本の箪笥も無かつたのであるが、美奈子の妹が不自由だらうと云ふので、箪笥の代にせよと五十円の金子を送つて呉れた。最初の金子は雑誌の費用に遣つて仕舞つたので、其れと感附いた妹は又一年程の後に二度目の五十円を送つて呉れたが、美奈子は其の金子をも大部分生活の方に遣い込んで妹が上京して来た時余り体裁が悪いので、言訳計りに古道具屋を探して廉物を買つて来たのが此の箪笥であつた。執達吏は抽出に手を掛けたが明か無いので、

『鍵がありますか。』

と保雄を顧みた。

『ここに。』

と言つて美奈子は帯の間から鍵を出して良人に手渡した。其れが如何にも苦しく怨めし相な目附であつた。

（四）

箪笥の上の抽出からは保雄の褻にも晴にも一着しか無い脊広が引出された。去年の暮、保雄が

郷里の講習会に聘せられて行つた時、十二年振に初めて新調したものだ。其の洋服代も美奈子が某新聞社へ売つた小説の稿料の中から支払つたので妻が夜の目も眠らずに働いた労力の報酬の片端である。又一枚しか無い保雄の大島の羽織が抓み出された。是は亡くなつた美奈子の父の遺品だ。保雄も美奈子も八九年間に一枚の着物すら新調した事は無いのである。保雄が執達吏の目録を覗いて見ると、

一、大島紬羽織一点見積代金参円

一、霜降セル地袴広一着見積代金二円

と書かれた。縁の方へ廻つて八歳に成る兄と六歳に成る弟とが障子の破れから覗いて居る。

『兄さん、今度は僕と兄さんの抽出ですよ。』

『新聞社から差押に来たんだ。』

兄の勇雄は父と母の話を聞き噛つて此んな事を言つて居る。悪い所をば小供等に見せる事だと両親は心の内で思つたが、差押に慣れた幼い二人は存外平気である。

『兄さん、まだ箪笥へ紙を張らないのね。』

『あとで張るんだらう。』

『二人とも門口で遊べ。』

と保雄は怒鳴つた。二番目の抽出からは二人の男の子の着類が出て来た。皆洗ひ晒しの木綿物の単衣計りであつた。三番目の抽出から出たのは二人の女の子の物計りで、色の褪めたメリン

スの単衣が五六枚、外へ此の双生児の娘が生れた時、美奈子が某書店に頼んでお伽噺を書かせて貰つて其の稿料で拵へた、緋の羽二重に花菱の定紋を抜いた一対の産衣が萎へばんでは居るが目立つて艶かしい。最後の抽出には来月生れると云ふ小児の紅木綿の着物や襁褓が幾枚か出て来た。次の間から眺めて居た美奈子は堪へ兼ねてわつと泣き伏した。何も知らぬ腹の中の児迄が世に出ぬ先から既に着るべき物を剥がれて行くのが母親の心に何れ丈悲しい事であらう。

『おい、然う感動するな。平気で居れ。身体に障るから。』

執達吏は其の産衣をも襁褓をも目録に記入した。何物をも見逃さじとする債権者の山田は押入の襖子を開けたが、其処からは夜具の外に大きな手文庫が一つ出て来た。文庫の中には保雄と美奈子の十年前の恋の手紙が充満収めてある。保雄は焚いて仕舞はうと言つた事もあつたが、美奈子は良人と自分との若い血汐も魂も元気も皆之に籠つてあると思つて、如何に二人が貧苦に痩せ衰へても、又如何に二人が艱窶を下げて生活しても、此の文庫の中を開けさへすれば永劫変らぬ二人の若々しい本体は何時でも見られるものだと極めて、良人にも手を触れさせぬ程大切にして居るのである。

『それはお銭に成るものぢや有りませんよ。』

美奈子は凛とした甲走つた声で云つた。執達吏と山田とは文庫を一寸開けて見て

『書類ですな。』

と言つて蓋をした。保雄は偶とキイツの遺した艶書が競売に附せられた事を思出して、自分達

の艶書は未だ銭に成るには早いと独り苦笑した。

門前には誰か来客があるらしい。

『お父様は。』

と訊くと、兄の勇雄が、

『お在宅ですよ。』

『お客様ですか。』

『新聞社から役人が来て差押をして居るの。』

『僕達の着物も、母さんのも、阿父さんの物も。』

と弟の満雄が言ひ足して居る。保雄は出掛けて行つて二人の小供を叱る勇気も無かつた。

（完）

青空文庫情報

底本：「読売新聞」読売新聞東京本社
1909（明治42）年3月14日～17日連載
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にをあらためました。
※底本の総ルビを、パラルビにあらためました。
入力：武田秀男
校正：門田裕志
2003年1月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

執達吏

與謝野寛

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/